

仮名に従うローマ字 ～日本語の書き方から考える～

本文はこちら → [\(仮名に従うローマ字の書き方\)](#)



日本語をローマ字で書こうとすると、私たちはつい「どう発音されるか」から考えてしまいます。どの音をどの文字で表せばよいのか、どんな綴りなら分かりやすいのか。ローマ字について語られる多くの議論も、そこから始まっているように思います。

けれども、ふと立ち止まってみると、日本語はすでに仮名という表記を持っています。しかもその仮名は、単に音を写した記号ではなく、漢字仮名交じり文の中で、語の切れ目や意味のまとまりを支えてきた文字です。私たちは普段、意味を意識しながら仮名を選び、自然に書き分けています。

仮名に従うローマ字は、そうした日常的な書き方を出発点にしています。

「どう聞こえるか」よりも先に、「なぜその仮名で書かれているのか」を考えてみる。そこには、語の構造や慣用的な書き方、日本語内部で積み重ねられてきた判断が反映されています。このローマ字は、それらをできるだけそのままの形で、ラテン文字に写し取れないだろうか、という素朴な問いから生まれました。

ここでいう「仮名」とは、音価の集合としての仮名ではありません。漢字仮名交じり文として日本語が書かれる中で選ばれてきた仮名、つまり意味構造を含み込んだ結果としての仮名を指しています。仮名に従うローマ字は、その背後にある構造を前提にしながら、仮名表記をできるだけ素直にラテン文字へと移し替えようとする試みです。

このローマ字は、日本語の表記を改めるための提案ではありません。誰かを説得したり、標準を打ち立てたりすることを目的としているわけでもありません。日本語の表記について考えていく中で、こういう捉え方に行き着いた、その過程と考えを記録として残しておきたい、という気持ちから書かれたものです。

ローマ字の話を始めると、決まって「それで、何のために？」と聞かれます。

ヘボン式が事実上の標準であることは承知していますし、それを使うこと自体を否定したいわけでもありません。

ただ、使うにせよ疑うにせよ、その前に、ローマ字という仕組みが日本語に何を与え、何を切り捨てているのかを、「仮名に従うローマ字」という考え方を手がかりに考えてみることもできるのではないかと思います。

ISO などの標準化の議論では、日本語をどのように書くべきかという思想的な問題よりも、まずはとにかく一つの標準を決めてほしい、という実務的な要請が前面に出ているように思われます。

目的に応じてさまざまな書き方があり得るという、日本語のローマ字表記の多様性そのものを否定する必要はありませんが、「標準として何を採用するのか」を決める議論と、目的が定まらないまま行われる議論とは、切り分けて考える必要があります。

私がここで述べているのは、ISO における標準化の議論そのものに参加するための主張ではありません。

もう一つ、私の言い方で間違えていた部分を修正しておきます。

標準とは、数ある不完全な選択肢の中から、一つを決めて使い続けるための約束事にすぎません。そこに不満が残ることを理由に、標準そのものを問い直そうとするのは、問いの向きが違っていました。

第1章 仮名から考えるという立場

日本語をローマ字で書くとき、多くの場合、出発点は発音である。どの音をどの文字で表すか、どの綴りが外国人にとって読みやすいか、といった観点がまず置かれる。しかし、仮名に従うローマ字は、その立場を取らない。

日本語はすでに、長い時間をかけて形成された仮名という表記体系を持っている。仮名は単なる音の写しではなく、漢字仮名交じり文の中で、語のまとまりや意味の切れ目を担ってきた文字である。私たちは日常的に、意味を考えながら仮名を選び、書き分けている。

仮名に従うローマ字は、この事実を出発点とする。つまり、「どう発音されるか」ではなく、「なぜその仮名で書かれているのか」をまず考える。その仮名が選ばれた背景には、語の構造、語彙的な境界、慣用的な書き方といった、日本語内部の事情がある。それらを無視して仮名を単なる音符号として扱うと、日本語の書き言葉としての性格は失われてしまう。

ここで注意すべきなのは、仮名に従うローマ字が、仮名表記そのものを絶対視するわけではないという点である。仮名は、漢字仮名交じり文という全体の中で意味を持つ。そのため、仮名だけを切り離して機械的に写すのではなく、背後にある意味構造を踏まえたうえで仮名を捉え直す必要がある。

この立場に立つと、ローマ字は日本語の外から与えられる道具ではなく、日本語の書き言葉の延長として位置づけられる。ローマ字は、日本語を別の体系に翻訳するためのものではなく、日本語がすでに持っている構造を、別の文字体系でなぞる試みとなる。

仮名に従うローマ字とは、日本語の音をどう聞かせるかを考える前に、日本語がどのように書かれてきたかを問い直すところから始まる。その姿勢こそが、このローマ字体系の基盤である。

第2章 仮名と漢字仮名交じり文の意味構造

日本語の仮名は、単独で用いられることはほとんどない。実際の書き言葉において仮名は、漢字仮名交じり文という全体の中で配置され、意味の理解を支えている。仮名に従うローマ字を考える際には、この前提を無視することはできない。

漢字は語彙的な意味の核を担い、仮名はそれを文の中でどのように用いるかを示す役割を果たす。送り仮名、助詞、活用語尾などに現れる仮名は、発音を補足するために付されているのではなく、語の構造や文法的な関係を可視化するために用いられている。

たとえば、同じ音であっても、どの漢字にどの仮名を添えるかによって、語の切れ目や意味のまとまりは異なる。私たちはそれを「音の違い」としてではなく、「書き分け」として理解している。仮名は、意味に基づいて選択される文字である。

このように考えると、仮名を単なる音価の記号として扱う立場は、日本語の書き言葉の実態から外れていることがわかる。仮名は、漢字と組み合わせることで初めて、その機能を十分に発揮する。したがって、仮名に従うローマ字においても、仮名だけを切り離して処理することはできない。

重要なのは、仮名の並びが、そのまま意味構造を反映しているという点である。語と語の境界、語幹と語尾の関係、助詞や接辞の付け方などは、仮名表記としてすでに表面化している。それを読み取らずにローマ字に写すことは、日本語の内部構造を捨てることに等しい。

仮名に従うローマ字は、漢字仮名交じり文として成立している日本語を前提に、そこで選ばれた仮名の配置と連なりを尊重する。ローマ字は、その結果として現れる二次的な表記であり、意味構造の代替物ではない。

この章で述べたように、仮名は音を写すための手段ではなく、意味を整理し、関係づけるための文字である。次章では、この意味構造が、どのように語の切れ目や形態素の境界として現れるのかを、より具体的に見ていく。

第3章 仮名はどこまで情報を担っているか

日本語の仮名は、単に音を写すための記号ではない。漢字仮名交じり文という書記体系の中で用いられることによって、仮名は常に意味構造と結びついた位置を占めている。

たとえば同じ音列であっても、漢字で書かれる語と仮名で書かれる語とでは、文中で担う役割が異なる。助詞・助動詞・活用語尾などが原則として仮名で書かれるのは、それらが語彙的な意味の核ではなく、文法的関係や話し手の態度を示す部分だからである。この区別は発音だけからは直接には読み取れないが、仮名表記を見ることで初めて明確になる。

「仮名に従うローマ字」は、この仮名の担う役割を、そのままラテン文字上に移し替えようとする試みである。音声を再現することでも、発音を説明することでもなく、仮名という表記単位が選ばれているという事実を尊重する。

そのため、このローマ字では、同音であっても仮名の違いがあれば綴りも異なる。逆に言えば、仮名が同じである限り、背後にある発音の揺れや歴史的仮名遣いの問題は、原則として問題にしない。何が書かれているか、どの仮名が置かれているかが、唯一の出発点である。

もっとも、仮名は漢字仮名交じり文から切り離されて存在するわけではない。どの語が仮名で書かれるか、どの部分が仮名に委ねられているかは、語の意味や文法的機能を踏まえた慣習の集積である。したがって、仮名に従うとは、仮名だけを盲目的に見ることではなく、日本語の意味構造を前提とした仮名表記の選択を、そのまま受け取るという態度を意味している。

この章で確認したいのは、ローマ字がどこまで厳密に書けるかではない。仮名がすでに多くの情報を担っている以上、それに従うローマ字もまた、日本語に寄り添った柔軟さを持ちうる、という点である。

第4章 q という文字の役割

本方式における **q** は、特定の音価を表す文字ではない。発音を写すための子音でも母音でもなく、仮名表記の構造をローマ字上で示すための、いわば「閉じる記号」である。

4.1 q は母音を伴わない

q 自体に母音は付随しない。**qi** や **qa** といった音節を立てることはなく、**q** は常にそれ単独で機能する。

q の直後に母音で始まる語彙的形態素が続く場合でも、その母音は q と結合して音節を形成しない。例えば、

- (吉井) Yosi + i → **Yosiqi**

と書かれるとき、これは「よし・い」という語構造を明示するための表記であり、q+i を一体の音として読むことは想定していない。q は「閉じ」をあらわす。

4.2 語の境界を示す記号としての q

q の基本的な役割は、語や形態素がいったん閉じられていることを示す点にある。仮名表記では連続して書かれていても、意味構造としては切れ目が存在する場合がある。その切れ目をローマ字上で明示するために q を用いる。

このとき重要なのは、「どこで切れるか」は仮名の背後にある漢字仮名交じり文の意味構造を踏まえて判断される、という点である。単に仮名の連なりだけを機械的に処理しているわけではない。

4.3 促音として読まれる場合

q の後に子音が続く場合、あるいは語尾に置かれる場合、その q は促音として読まれるものとする。これは音声的な写しというよりも、「そのような綴りになったらそのように読む」という読みの規則をあらかじめ定めているにすぎない。

したがって、q は一貫して「閉じ」を表す記号であり、

- 母音と結びついて音節を作ることはなく
- 意味構造上の切れ目を示し
- 綴りの位置に応じて促音として解釈される

という三点において理解されるべきものである。

q を特定の音に対応づけて説明しようとする、この方式の核心はかえって見えにくくなる。q は音を表すために置かれているのではなく、仮名表記が内包している構造をローマ字上に写し取るために置かれている。

第5章 運用というより、書き方の姿勢

仮名に従うローマ字は、具体的な使用場面や実用上の利便性を想定して設計されたものではない。どこで使うのか、誰が使うのか、使われるとしたらどの方式と競合するのか、といった問いは、この方式の内側からは立てられていない。

ここで問題にしているのは、「どう書くか」という技術よりも、「どう捉えて書くか」という姿勢である。

5.1 発音を写すのではなく、構造を写す

本方式は、日本語の音声をできるだけ正確に再現しようとするものではない。発音の近さや聞こえ方の自然さは、判断基準の中心には置かれていない。

重視されるのは、仮名表記が背後に持っている語の切れ目や意味のまとまりである。漢字仮名交じり文として把握されている意味構造を前提に、その結果として選ばれている仮名表記を、できるだけ矛盾なくラテン文字に移し替える。その態度自体が、このローマ字の核心にある。

5.2 一義的に決めきらないという選択

仮名に従うローマ字は、すべてを厳密に一義化することを目的としていない。同じ仮名列であっても、意味の捉え方によって切り方が変わることはあり得るし、その余地を排除しようとはしない。

どこで語を閉じるか、q を置くかどうかといった判断は、機械的な規則だけで完結するものではなく、書き手が日本語をどう理解しているかに委ねられている。

この曖昧さは欠点ではなく、日本語そのものに寄り添った結果として残されている。

5.3 完成形を想定しない

本方式には、「これで完成」という最終形は想定されていない。表記の細部や例の積み重ねは、書き手自身の日本語理解とともに変化し得る。

本稿で述べてきた仮名に従うローマ字は、日本語の表記を現実にかこう改めるべきであるという提案ではなく個人的な提案にとどまる。こういう体系を考え、こういう考え方もあり得るということを記録したものである。

冒頭にリンクした本文では、この仮名に従うという考え方に基づいた実際の表記法（私案）を提示しました。

本文（書き方編）ではこの概要では詳しく触れなかった拗音、長音、q の使用法、撥音等、具体的な表記について提案として記載しています。

こうすべきと強要するものではなく、こうしたらどうか、私はこう考えたということです。参考にしてもらえたら幸いです。

本文に進む → [（仮名に従うローマ字の書き方）](#)